

氏 名 (本 籍)	ベンサラム カリル (モロッコ)		
学 位 の 種 類	医 学 博 士		
学 位 記 番 号	博 甲 第 401 号		
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 61 年 3 月 25 日		
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当		
審 査 研 究 科	医 学 研 究 科		
学 位 論 文 題 目	SIGNIFICANCE OF ABNORMAL PANCREATICO-BILIARY DUCTAL UNION IN THE CARCINOGENESIS OF THE BILIARY TRACT: ITS RELATIONSHIP TO METAPLASIA AND CARCINOMA (胆道系発癌における膵管胆道合流異常の意義：特に上皮化生と発癌の関係について)		
主 査	筑波大学教授	医学博士	中 村 恭 一
副 査	筑波大学教授	医学博士	岩 崎 洋 治
副 査	筑波大学教授	医学博士	大 管 俊 明
副 査	筑波大学教授	医学博士	小 形 岳 三 郎
副 査	筑波大学助教授	医学博士	福 富 久 之

論 文 の 要 旨

〔目 的〕

胆嚢胆管結石と癌との共存例が多いことから、両者の因果関係が議論されている。さらに、最近では膵管胆道合流異常と胆嚢胆管癌との関係が注目されはじめている。

本研究は、その膵管胆道合流異常 abnormal pancreatico-biliary ductal union (APBDU) と胆嚢胆管癌との関係を解明することが目的である。

〔対象および方法〕

研究対象は、ヒト胆嚢胆管組織の手術材料および剖検材料、そしてAPBDU作製実験犬胆嚢胆管組織である。

ヒト材料の病変別症例数は胆嚢炎 175 例、胆嚢癌 25 例、総胆管癌 35 例、そして対照として剖検胆嚢 20 例を用いた。

方法として、ヒト材料ならびに実験犬材料を病理組織学的、組織化学的、ならびに電子顕微鏡的に解析を行った。

〔結 果〕

1. ヒト材料について

病変別にAPBDUの頻度をみると、胆嚢炎症例は3% (5/175)、癌症例18% (11/60)と癌症例に高く、両者の間に統計的有意差 ($P < 0.01$) が認められた。

上皮化生 (腸上皮化生と幽門腺化生) の出現頻度は年齢の増加とともに高くなる傾向がみられ、特に女性においてその傾向が顕著であった。APBDUの有無と上皮化生との関係は、病変の種類とは無関係に、APBDUのある症例に上皮化生出現頻度が高く、それらの間には統計的に有意差 ($P < 0.01$) が認められた。なお、対照例に上皮化生は認められなかった。

APBDU症例における上皮化生は、APBDUのない症例に比べて若年者にみられる傾向があり、そして上皮化生の程度は一般的に強かった。さらに、APBDUのある癌症例の年齢は、APBDUのない癌症例よりも若年傾向がみられた。

癌組織型については、APBDUの有無とは相関が認められないが、上皮化生の著しいものに分化型癌が多かった。なお、Best's Carmine染色で、上皮化生の中に多くのPaneth細胞を見いだすことが出来た。

2. 実験材料について

APBDU作製実験犬材料における上皮化生は、術後3ヶ月頃から上皮化生が出現し、1年以上を経過した例では全例に上皮化生が認められた。2～3年経過群の2匹に胆嚢の乳頭腫が認められたが、癌の発生はなかった。なお、対照である非手術例6匹の胆嚢には上皮化生は認められなかった。

〔結 論〕

APBDUの癌症例は、それがない癌症例に比べて上皮化生が一般的に強く、そして若年者傾向があることから、胆嚢胆管上皮化生は癌発生母地となる可能性がある。また、APBDU症例には上皮化生の出現率が高いこと、そして実験犬胆嚢の組織所見から、上皮化生は膵液の逆流が一つの原因であると考えられる。

審 査 の 要 旨

胆道系疾患は欧米に多く、また、近年我が国では食習慣の西欧化に伴って胆道系疾患が急増している。現在、胆道系良性疾患と上皮化生、そして上皮化生と癌との因果関係が問題となっている。

本研究は、人体材料とAPBDU作製実験犬とから得られた所見にもとづいて、胆嚢胆管の化生上皮は発癌母地として重要であることを証明したものである。このことはAPBDU症例の手術適応と手術方法について重要な示唆を与えるものである。

よって、著者は医学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。